

死者と生者の間に②

葬儀の様式や内容は社会背景や宗教によって異なります。仏教では、死を生命の根源を考える契機として捉え、葬儀を死者と惜別し、死者を永遠の世界に送る人生のうちで最も重要な儀式と考えていると藤井正雄氏は解説しました。このように葬儀の様式にはそれを行う人たちの死生観、宗教観が深く関わり、宗教の違いが葬式の様式の違いとして認められ、同時に、葬儀は死者のためだけでなく、生者のためにという意味合いを持つものです。残された者が、死者を受容し、生者として生きつづける手続きとなる儀式が葬儀であるともいえます。

葬送儀礼の文化

歴史上初めての葬儀跡といわれているのは、イラク北部にあるシャニダール洞窟で見つかった約6万年前と推定されるネアンデルタール人の骨で、見つかった花粉から、死者には花が添えられていたといわれます。ただ、その解釈には諸説があり、たとえば、岡ノ谷一夫氏は「死を痛む気持ちと、死後の世界を信じたい気持ちを彼らがもっていたと主張する研究者もいます」（岡ノ谷一夫『「つながり」の進化生物学』朝日出版社、2013年、p.93）と述べた上で、次のように話しています。

ネアンデルタール人には、芸術を味わう気持ちや、死を恐れる気持ちがあったのではないかとされているけれど、それらは言葉でつくられた概念ではなかったかもしれない。漠然とした恐怖と不安、そして祈りからなる気持ちだったと思います。それは、「今、ここ」にない、未来に起こる存在の消滅を怖いと思うような抽象的なものではありません。（同書、p.94）

進化生物学という分野でコミュニケーションを研究する岡ノ谷氏は、ネアンデルタール人は言葉のようなものは持っていたかもしれないが、言葉を持っていたわけではないと考察しています。だから、「お墓に花をお供えしたというの、ただそばに花が咲いていただけかもしれない」（同書、p.94）とも言っています。つまり、人間には言葉があるので、死んだ先のことが考えられる、自分が存在しない将来まで考えられるようになった、人間は言葉によって、自分の将来を考えることができるようになったということです。これは、数学でいう「再帰的な演算能力（ある時点でN+1を新たなNとして利用できるようになると、どんな足し算でも掛け算でもできるようになる）」と関係し、再帰的な演算ができると、今日、今日の次の明日＝新しい今日ということがわかるようになり、そうすると、そのような明日が延々と続くことがわかり、その先にある「私がない明日」もわかり、死が発見されるということになります（同書、pp.83～85）。ですから、ネアンデルタール人が私たちと同じような言葉をもっていたなら、「みすみすクロマニヨン人にやつつけられることはなかった」（同書、p.94）と思われるのです。

こうして、死の概念を獲得した人間は、様々な様式をもってそれを表現し、残し、伝えてきました。葬送にかかわる一連の儀式や手続きはその集大成というべきものです。

医療人類学の立場で、生（誕生）、死、病、医療などについて、多くを論じている波平恵美子氏は、「死の文化」というものを私たち人間はもっていて、それは、私たちの属している社会に

依拠し、影響を受けていると指摘しています。

波平氏によると、医療人類学は、「死の文化」を大きく二つに分けて考えることができることを示しているようです。

まず、「死の文化」とは、それぞれの社会が、その時代時代に応じて発達させてきたもので、死の判定・確認の方法、遺体の処理法、死者への悼みを表現する儀式、遺族や血縁者に対する周囲の人々の扱い方、死の認識、死後の世界の存在やその観念等を含みます。そして、一般的には次のように説明されます。

規模が小さく、成員の流動が少なく、社会的経済的変化が緩やかな社会では、個人が学び取る「死の文化」の多様性が少なく、集団での行為が中心となる死者儀礼（例えば日本における通夜、葬式、初七日、年忌供養などの死者を追悼するための儀式）が発達しており、言語表現によって伝達される観念的な「死の文化」は発達していない。それに対し、多様な文化的社会的な背景を持つ集団が入り交じって社会を構成していたり、社会的経済的な変化が大きく、成員の流動が多い社会では、集団行動を伴う儀礼を中心に発達する「死の文化」よりも、観念的な言語表現によって伝達されやすい「死の文化」が発達する傾向にある。（波平恵美子『病と死の文化 現代医療の人類学』朝日新聞社、1990年、pp.37～38）。

ただし、近代社会の条件が揃っていると考えられる日本の社会は、文化人類学でいう「伝統的社会」（家族が持つ社会的機能が強い、個人的な人間関係が公的にも物事の決定に大きな影響力を持つ、家族・出身校・職場などへの個人的帰属意識が強い等）としての特性をかなり残して、死者儀礼が、葬式以外にも一連のもの（通夜、年忌など）として行われ、親族（や知人）はそれへの参加が社会的な義務となっているので、それが儀礼中心の「死の文化」の発達と保持に寄与していると考えられているとされます（同書、p.38）。

このような死者および死者儀礼にかかわる日本の社会的要件について、波平氏は、①日本人の死生観は人間を超越する絶対神の存在を認めず、神と人との関係が曖昧であるような信仰体系を発達させた、②このような死生観は自己の存在のあり方に直接かかわる、③日本社会は産業構造や政治制度の変化にもかかわらず個人をめぐる人間関係は明治期とそれほど変わらなかった、④自我の成立の基本的要素が家族や仲間などの人々との人間関係で保持されてきたということにおいても大きな変化はなかった、との見解を示しました。しかし、医療の発達や病院での死の増加など、医療現場での変化が日本人の死生観や自我のあり方を変えていくのではないかと推測しています（同書、p.59）。

さて、医療人類学が示す「死の文化」は、集団行動を伴う儀礼を中心に発達する「死の文化」と、観念的な言語表現によって伝達されやすい「死の文化」とに大きく分けられ、それは、その社会の工業化の度合いや多様性の程度などに影響をうけると説明されました。しかしながら、波平氏が指摘したように、「死の文化」やその表象としての死者儀礼が表す「死」は、常にそれを執り行う遺された人々が受け継いできた価値観（人間観や死生観）とかかわっていることを意識しなければなりません。